

人と科学技術の調和の世紀に

立石科学技術振興財団は、「科学技術と人間との調和」の理念のもと、10年余にわたり、積極的に科学技術の研究助成活動を続けてまいりました。

立派な研究成果集も拝見いたしていますが、「会計」を専門としている者にとっては、大変残念ながら、その内容はほとんど理解出来ないまま、科学技術の進歩の恩恵には、どっぷりとつからせていただいているひとりです。

生き生きとした財団の活動、企業経営の成果も、会計人が拝見するときは、無機質な数字の羅列になっています。その数字の中に、生命ある動きをみつけてゆかなければならないと、かねがね思っておりました。

最近、よく“いやし”という言葉聞くようになりました。いやしが、他から与えられるものようにいわれていることには、抵抗を感じております。

人には、仕事の中でも、スポーツや、いろいろな趣味にでも、自分を豊かにしていけるものをもっているはずです。

私は、少年の頃、ゴッホの絵をみて、衝撃をうけました。歳を重ね、いろいろな知識とともに、多くの名画をみるようになり、素晴らしい絵画に接し、感動を得たものも多々ありますが、私の場合、いつも又、ゴッホに戻ってしまっています。

自分の天職と考えている会計の仕事の合間合間に、ゴッホを観ることが、心の糧となり、自らを昇華してくれたと思います。

数年前から、毎年アムステルダムのゴッホ・ミュージアムを訪ねるようになりました。

直接に、ゴッホの麦畑や、糸杉に接しますと、ほんものの太陽を浴び、自分のまわりの空気が動いていくような躍動感をおぼえます。

ひまわりは、その旺盛な生命力のなまなましさを、黄色の絵具で固められ、陰影のない平板な彫塑のような静けさにかえられた、誰もが画きえなかった“ゴッホのひまわり”でした。

人とは、このような動と静のハザマをゆれ動きながら、生きているものではないでしょうか。

そして、とうとうパリ郊外のゴッホのお墓にお詣りをするに至りました。

狂気の中で夭折した天才の墓前で、胸中をよぎるものは大変複雑でしたが、彼が世界に遺してくれた大遺産に、感謝の花を供えてまいりました。

科学技術と、遠い存在にある人の心の技が、人々の文化として、ますます大切になってくるのではないのでしょうか。

21世紀こそ、人間と科学技術の調和の世紀であってほしいものです。



監事 辻 敢
(公認会計士 辻会計事務所 会長)